



安心できる介護・納得できる介護保険・信頼できる制度の実現  
**NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会**

発行人 梶 宏

事務所 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町3-20 賀陽コーポラス 809

TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp



<https://npokaigo.or.jp/>

### 3・8院内オンライン集会に参加して思う

理事長 梶 宏

厚労省は2024年度の介護保険報酬改定で、訪問介護の基本報酬を1.59%下げると発表した。訪問介護に当たるヘルパーの待遇が悪いため、募集しても集まらないことが周知の事実なのにその報酬を下げるというのだから、これはひどい話だ。

3月8日、「ウィメンズ アクション ネットワーク(上野千鶴子代表)」はじめ、介護事業を行っている事業者や現場で働く人たちが、参議院の会議室で院内集会をもった。厚労省も担当者が5名参加し、質問に回答してくれた。国会議員も、山井和則さん(衆議院議員)、福島瑞穂さん(参議院議員)、大河原まさこさん(衆議院議員)をはじめ多く参加された。

今回の介護保険改定の最初の案では、「要介護1及び2」の場合は、介護保険からはずして自治体による「総合事業」の範疇に入れるということと「ケアプラン作成」を利用者負担とすることが出されていたが、「最悪の改定」と叫んで頑張ったせいで、いったん引っ込められた。「黙ってたらあかん」という思いもした。が、訪問介護問題では、ヘルパー不足となって、「介護難民」という事態が生まれてくるに違いない。

厚労省がいうところでは、全介護保険事業所の利

益率が2.4%であるのに対し、訪問介護事業所の平均的な利益率が7.8%あるからだそうだが、実際に地域の小さな事業所の撤退は増加しており、調査に対して回答する余裕もないという所が多いと考えられる。利益率を高めているのは、サービス付き高齢者住宅が増えて、同じ経営体による訪問介護が提供されていることにある。いわゆる「囲い込み」で、ヘルパーの移動時間が少ないから効率がいいのだ。

新自由主義政策のもとで、福祉の世界に株式会社が入り、それが暴走している感じがする。流れができてしまったとき、それを止めることは難しい。京都市は第三セクターとして市が育成してきた京都福祉サービス協会が独立するといういい事例を実現しているのだから、ヘルパー確保に力を見せてほしいと願う。

院内集会の最後に、京都からオンライン参加で「認知症の人と家族の会」代表理事の鎌田松代さんがしっかりと発言してくれた。自分が認知症になることも想定する市民、自分の最期をどう生きるか、あなた任せしない市民こそがこの社会の崩壊を食い止めることと信じている。そういう意味で、私たちの絆は力をもつと信じている。

#### 2024年度通常総会

5月18日(土) 13:30~14:30 ひと・まち交流館 京都 第5会議室

15:00 から同会場で記念講演会を開催します。詳細はP7に。

#### 目次

3・8 院内オンライン集会に参加して思う	1
3月研修会「”終のすまい”はどうしたいですか。」報告	2~3
2月研修会「警察OBが運営する認知症サポートサービス」報告	4
よりよい介護をつくる市民ネットワークからの報告	5
会報についてのアンケート結果	6
シリーズ「私の介護体験」/4月&5月研修会案内	7
会員リレーえっせい/シルバー川柳/会員募集/編集後記	8

# “終のすみか”はどうしたいですか。

～会員アンケート調査から考える“よりよい入居施設”とは～

第133回  
研修会  
報告

日時：3月23日（土） 13：30～16：30  
会場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室  
講師：中川 慶子さん  
（当会 副理事長）  
参加者： 29 名



会員の多くが高齢者である“きょうと介護保険にかかわる会”。今回は、会員にアンケート調査を行い“終のすみか”として介護を受けたい場所やその理由について、36名の方から回答をいただきました。

研修会では、アンケートに寄せられた様々な思いが紹介され、その思いを介護保険制度とマッチングさせるにはどのような課題があるのかを、現状を踏まえ事例も交えながら利用者目線で分かりやすく丁寧に説明していただきました。

## 高齢者の最期の場所について（アンケート結果より）

「介護を受けたい、終のすみか」についての質問では、約7割が「自宅で」と回答され「気の向くまま好きなように」「少ない年金で施設に入れるのか？」「施設では思うような生活は困難か？」など、「落ち着ける居場所・住み慣れた場所=自宅」という理由でした。「介護施設や介護付き高齢者住宅に住む」という回答には、自宅で過ごしたいが、家族の負担や老々介護のことを考えるとやむを得ないという思いが書かれていました。

2016年の国のデータでは、1976年以降核家族化の進行等により最期の場所は病院死が7割以上と自宅に比べて圧倒的に多く、今回の回答者の思いとは大きな隔たりがありました。

## 2045年問題とは

日本のすべての都道府県で高齢化率が30%を超えるという2045年問題では、65歳以上の高齢者が4割、現役世代5割、子ども1割になると予測され、親子で構成する家族を基本とした現在の社会の仕組みは立ち行かなくなり、介護保険制度の維持が難しくなるのではないかとのことでした。

## 「終の住まい」を自宅とすること

「施設に入らず『自宅』を終の住処にする方法」の著者である田中聡さんの経験が紹介され、終の住まいを自宅とすることはQOL（生活の質）ではなくQOD（QUALITY OF DEATH：最期の質）の向上に繋がると話されました。ケアマネジャーや訪問医との信頼関係を築くことが重要、家族・住環境による介護力の確保と

いう課題のクリア、そして本人が自宅で最期を迎えたいという強い意志が明確でなければ自宅を「終の住まい」にすることは難しいということでした。

## 自分にあった施設の見分け方とは

施設は介護保険法等の法律で整理すると次の3つに分けられます。



- ① 介護保険法(特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護医療院)
- ② 高齢者住まい法(サービス付き高齢者向け住宅「サ高住」)
- ③ 老人福祉法(有料老人ホーム、軽費老人ホーム、養護老人ホーム、認知症グループホーム)

「特別養護老人ホーム」は要介護3以上で入所対象となること、「サ高住」は高齢者専用の共同住宅で基本的には介護サービスがなく健康な人でも入居できるが、毎月入居費が14.5万円以上かかる(2022年相場)ということ、施設の見分け方として費用や設備、立地条件等いくつかのチェック項目が考えられるが、それらを基に事前に調べておくことが大切であるということでした。

**そして、最期は・・・**

“終のすみか”についてあらためて考えると、在宅を望んでも介護保険制度と「自分の思い」をマッチングさせるには、家族や住環境のあり方、費用の確保など一人ひとりの生活状況によって様々な課題があることが分かりました。

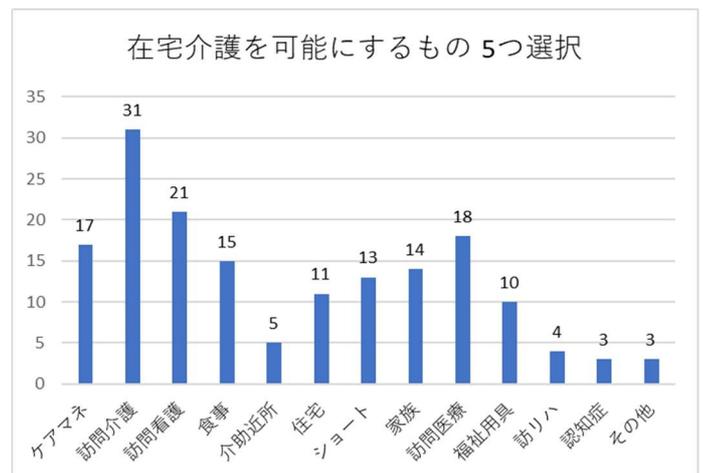
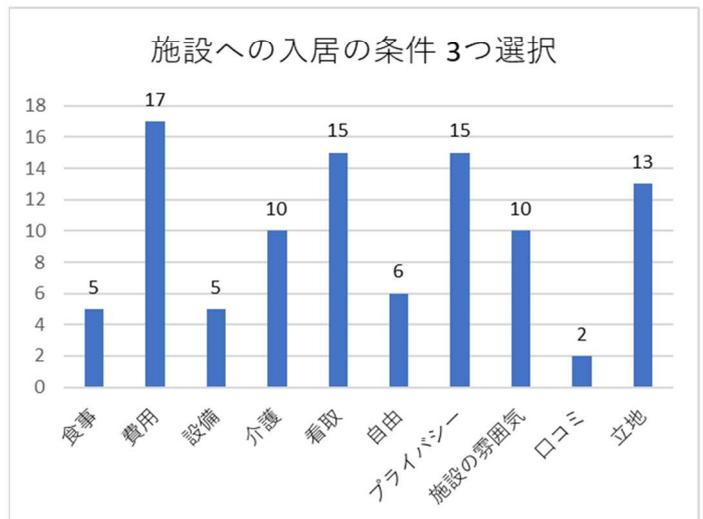
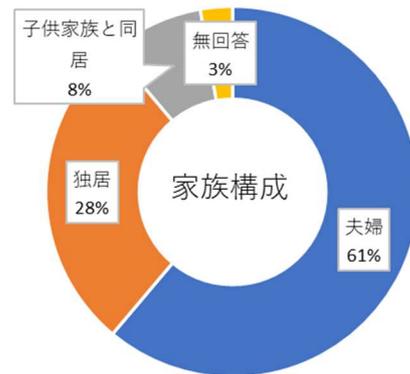
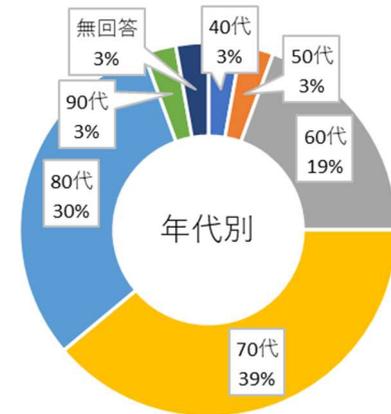
「在宅か施設か、終の住処は何を選ぶのがいいのか」、「エンディングをどのようにデザインしていくのか」を考えるよい機会であったと思いました。

最後に講師から「私たちはそれぞれの目の前の課題について曖昧にしておかず、これからの生き方を準備することが大事なことでないでしょうか」との言葉があり、研修会が締めくくられました。講師のお話の後、グループに分かれてそれぞれが考える終のすみかについての思いを語り合いました。

(栗山 博臣記)



**【アンケート結果グラフ】**



## 警察OBが運営する認知症サポートサービス

～認知症高齢者の保護の現状と解決に向けて～

第132回  
研修会  
報告

日時：2月24日（土） 13:30～16:30  
会場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室  
講師：中邨（なかむら）よし子さん  
（一般社団法人つなぎ代表理事 府警OB）  
参加者：26名



### 一般社団法人「つなぎ」とは

昨年3月に京都府警を退職された中邨（なかむら）よし子さんが、同じく府警を退職された竹内雅人さんとともに、警察署などに保護された認知症の高齢者のお迎えを代行するというサービスを提供するために立ち上げた非営利法人。全国的にも先駆けとなるサービス。

### 現在の認知症高齢者の状態

認知症の方は、外出先で突然居場所が分からなくなり、迷ってしまうことがある。親切な人に発見され警察に通報されると、警察署で保護されることになる。警察では「警察官職務執行法」に基づき、家族に連絡するわけだが、問題はその後。家族がすぐに迎えに来てくればよいが、連絡が取れない、仕事ですぐに動けない、などの事情で、本人は不安なまま警察署内で待たされることになる。

### 保護された方を送迎するルールがない

警察で決まっているルールは、保護したあと、家族に連絡するところまでだ。誰が当の本人を迎えに行き、誰が送るのかについては、決まったルールがない。また警察は保護した方を24時間以内に引き渡さなければならないことになっている。

### 保護される認知症高齢者が増え続けている

警察に保護される認知症高齢者の数は年々増え続けている。京都府内で警察に保護された件数をみると、平成25年は1,831人だったが、令和3年には3,314人、令和4年には3,490人と増え続け、令和5年では4,007人となり、平成25年と比べると、なんと2.5倍の件数だ。この数字は1日平均11人の方が京都府下のどこかの警察で保護されていることになる。

### 「つなぎ」のサービス内容

前もって契約をしておくことが必要だが、認知症高齢者が警察に保護されたあと、タクシーでお迎えに行き、自宅なり入居施設に届けるというサービスだ。各警察管区にスタッフ（警察OB）が待機しており、いざという時に出勤する。「つなぎ」は警察とのネットワークがあるため、契約者の引き渡しの手続きもスムーズにいく。また上記のサービス以外にも契約者の自宅にカメラを設置するほか、GPS付きの「見守りカード」を配布するなど、安否確認のサービスも提供している。

### まとめ

「つなぎ」には2つの思いが込められている、と言う。一つは家族との橋渡しであり、もう一つはこのようなサービスが行政や事業者などで広がるまでの「つなぎ」になること。制度の狭間にあるこのサービスが、今後とも継続・発展することを心から祈りたい。

### 《参加者の感想》

- 思いがけないサービスだった。広くみんなに知られる活動になれば良いと思う。
- これからの時代、必要なサービスです。大いに広めて、行政も巻きこんで進めてほしい。
- 民間のサービスではなく、半官半民の道筋が見つかれば良いと思う。
- 全国展開していきたいとのこと。是非とも事業が存続してほしい。

（吉川 正義記）

京都市左京区松ヶ崎の事務所1階で「つなぎカフェ」を営業しており、地域の方の居場所として活用されている。2階はレンタルスペース。情報発信もしている。

## よりよい介護をつくる市民ネットワークからの報告

### 「高齢者施策についての質問」へ京都市から回答

2月6日投票の京都市長選挙にあたり、ネットワークから候補予定者（当時）への公開質問状を提出しましたが、新市長に当選された松井氏から回答はありませんでした。そこで松井市長の初登庁日の2月26日に同内容の質問状を提出し、3月7日に保健福祉局健康長寿のまち・京都推進室 介護ケア推進課より回答をいただきました。なお、京都市長名による回答ではありませんが、担当課に確認したところ「市長への手紙」に対する回答手続きに従って対応頂いているとのことでした。

京都市からの回答は右記のQRコードからご覧いただくことができます。また市会各党派と記者クラブにお知らせし無所属議員も含めて配布しました。内容についての検証をさらに進める予定です。



### すこやかプランへのパブリックコメントは前回より減少

「第9期京都市長寿すこやかプラン（案）に対する市民意見募集の結果について」が「第5回京都市高齢者施策推進協議会（R6.2.29）」の「資料3」で公開されました。

意見者数130人（前回：170人）、意見総数206件（前回：303件）と、前を下回りました。ネットワークはパブリックコメント啓発活動として名刺大の啓発カードを2000枚作成し、各団体から地域包括支援センターや区社会福祉協議会をはじめとして関係先に配布したにもかかわらず残念な結果になりました。

### 総合事業の訪問型サービス基本報酬に注目

上記の第5回協議会で「第9期京都市長寿す

こやかプラン（案）」が示されました。厚労省発表で訪問介護基本報酬の引き下げが話題になっていますが、要支援1・2を対象とした総合事業の報酬は地方自治体が決めることになっています。しかし京都市からは「国の方針」を理由に、総合事業の訪問型サービス介護型と生活支援型の月額基本報酬の単位引き下げ案が示されました。ところがその後3月28日に開催された第6回協議会では「国の告示」を理由としてその単位引き下げが撤回され、混迷ぶりがあらわになりました。今後の動きに注目したいと思います。

### これからの「よりよい介護をつくる市民ネットワーク」

介護保険をめぐる様々な課題がある中、市民団体がネットワークを作って取り組むという動きは他では見られません。今後も構成団体それぞれの活動内容を紹介しあい、課題を共有していく必要性を会議で確認しました。

ネットワークが昨年11月25日に開催したシンポジウムで基調講演、コメンテーターとしてお世話になった浜岡政好先生（佛教大学名誉教授）を囲む会を3月29日に開催しました。先生からは「自助・共助・公助」論の本質について研究を進めておられるお話、また集まった各団体代表者やメンバーからは介護保険や介護サービスについての意見が活発にかわされました。



（よりよい介護をつくる市民ネットワーク  
事務局長 梶 政彦記）

# 読んで面白い、役に立つ会報をめざして

## 「会報」についてのアンケート結果

会報は2000年3月の当会発足後、同年7月7日に創刊され、今号で135号となる。情報交換、情報提供の場として発行し続けている会報だが、その内容や配布方法について、読者の方々のご意見を聞かせていただきたいと考えアンケートを実施した。アンケート結果の詳細とアンケート用紙は右のQRコードにアクセスしてご覧いただきたい。

(アンケート結果)



(アンケート用紙)



### 会報への関心度が高い方が回答

アンケートは2024年2月号の会報に同封する形で実施し2月末日を〆切とした。また当会会員のメーリングリストでメール発信した。回答があったのは計39。会員からが34、会員外からは5だった。結果として会報に興味・関心を持ってくださっている方からの回答がほぼ全数だった。会報が手元に届いても興味が持てない、読む気がしないと思われる方々からの声を聞く方法は、別途工夫する必要がある。ただ会員外で20~30歳代の女性が全頁、そしてシリーズ物もすべて必ず読むと回答して下さったのは励まされた。

### シリーズ物への評価

いずれも必ず読むという回答が8~9割だった。

「巻頭言」 時事的な問題について理事長が明確な立場で意見表明されていることに共感を覚えるという声が多かった。参考になる、新しい気づきがある、楽しみにしているという声も多かった。

「研修会報告」 不参加の時の内容が分かる、出席時は内容の復習が出来るという声をいただいた。録画(youtube)とリンクしていると、参加できなかった時に嬉しいという声もあったので検討したい。

「介護保険ホットnews」 勉強になる、参考になるとの声も多かったが、初めての方向けのニュースもあっていいのではという声もあった。

「シリーズ私の介護体験」 貴重な体験談が興味深い、参考にしたいという声が多かった。

「会員リレーえっせい」 かかわる会の皆さんの課題や生き方がわかり楽しく読んでいる、色々な人がいて興味深いという声が寄せられた。

「シルバー川柳」 クスッと笑わせていただいている、心の琴線に触れる作品がある、硬い記事の中に笑いのコーナーがあってとても良い企画と思うとの声をいただいた。

### 今後取り上げてほしい内容は？

「介護サービス事業所の情報」が19で一番多く、続いて「介護保険の基礎知識」17、「介護に関する相談コーナー」14、「読者の声欄」13と続く。「介護サービス事業所の情報」といっても制度的なことについての情報が必要なのか、それとも個別事業所の情報が欲しいのか、この選択肢からは不明だが、たぶんその両方だろう。介護保険の基礎知識の内容も含めて、今、読者の方々がどのような情報を求めておられるのか、具体的に把握することが必要であることを考えさせられる結果だった。

(広報担当：冬木 美智子記)

介護を受ける、介護をする、そのナマの声を繋ぎます

シリーズ「私の介護体験」

## 第17回

# 「かかわる会」誕生のきっかけ

会員 梶 寿美子

母が70歳になる前ごろからおかしい感じが出てきました。病院から山ほどの薬をもらってくるようになり、ちょうど私が乳がんで右胸全摘の手術を受ける時も付き添うことが無理でした。

ある日、母は、私の夫がだいたい物を盗んだと言って私たちの部屋に入ってきたので、それを止めようとする、私の胸を押しました。手術後の痛みがまだ残っていることも忘れて。たまたま、東京に住む弟からの電話があり、異常なようすを感じた弟は、すぐに新幹線で母を迎えに来てくれました。

弟の連れ合いは看護師で特養の施設長だったので、母の受け入れに努力したようです。でも、彼女の身体に引っかき傷があるのを見て弟も助けを求めてきました。夫と私は東京まで行って、母を連れて帰りました。

自宅に戻ったある日、徘徊しようとする母を止めようとする、怒った母は「めくらの子なんか産みとうなかった」「我慢ばかりしてきた。うちの人生返して」と泣きました。「私かてこんな身体で生まれとうなかった」。ついこの間のことのように思い出されます。府立洛南病院で森俊夫先生の診断を受け、しばらく入院して自宅に戻ってからデイサービスにも連れていきました。やがてショートステイに入ってその

まま特養「こぶしの里」に入れていただきました。夫が保護者会の役員を受けてくれ、「いい勉強になった」と言ってくれました。先進的な施設でした。薬は全部やめにして、14年近くお世話になり、施設で看取っていただきました。夫は、母の認知症が、この「かかわる会」をつくるきっかけになったと言っています。

(梶寿美子さんは梶理事長の奥様で全盲の箏曲家)

## 第134回 研修会 4月野外研修会のお知らせ

日 時：4月30日（火）9:45 叡電出町柳駅集合  
行き先：特別養護老人ホーム 花友いちほら  
内 容：2015年開所の施設見学と外国人労働者の雇用のお聞きします。  
定 員：20名（先着順です）



## 5月総会 記念講演

## 能登半島地震と東北福島原発 事故から学ぶこと

日 時：5月18日（土）15:00～16:30  
会 場：ひと・まち交流館京都 3階 第5会議室  
講 師：丹波史紀さん  
(立命館大学産業社会学部現代社会学科教授)  
参加費：無料

### プロフィール

前任地（福島大学）で、災害地をずっと見続け、避難者支援活動をされてこられました。先行きの見通しのない高齢者の生活再建、尊厳ある復興とは・・・色々とお話をさせていただきます。

原子力災害  
からの  
複線型復興

被災者の生活再建への道

丹波史紀さん

丹波史紀さん  
最新著書  
2023/4/20

## 会員リレーえっせい ⑥9

坂野 裕也

### 三刀流で頑張りたい



私は大学で理学療法士の国家資格を取得した後、急性期や回復期の病院で経験を積み、現在は訪問リハビリの業務に従事しています。訪問リハビリとは、利用者の自宅を訪問し、心身の機能の維持・回復や、日常生活の自立を支援するために、リハビリテーションを行う介護保険や医療保険を使ったサービスのことです。リハビリテーションの実施だけではなく、介護する家族へのアドバイスや相談、福祉用具選定や住環境整備のご提案なども行います。

私は自宅でのリハビリはとても大切であると考えています。なぜなら、高齢者の転倒事故は自宅内で最も多く発生しているためです。転倒によって骨折や脳出血などの重大事故につながったり、要介護状態になることもあります。そこで、安全に在宅生活を送るために、動作の練習や環境整備、注意するポイントをお伝えすることなどが極めて重要です。

そのことから、より専門性を高めたいと思い、30歳を超えてから大学院に進学し、安全な住環

境整備についての研究を行ってきました。そして現在は、杖やシルバーカーなどの歩行補助具の効果と心身機能との関連性についての研究を続けています。世界的にみても報告がそれほど多くない分野ではありますが、高齢者の4~5割が何らかの歩行補助具を使っているという報告もあるため、歩行補助具の効果の検証や、心身機能の変化についての研究は意義があるものと考えています。

そして、私は2児の父でもあります。休みの日は子どもに振り回され、普段の仕事よりも疲れていることもしばしばあります。とは言え家族サービスや子どもとの時間も大切にしたいので、こちらも絶対に手を抜くことはできません。

もう段々と若さが強みにならない年齢になってきており、無理は禁物だと自覚しています。しかし、気持ちは若く、これからも「リハビリテーション専門職」×「安全な生活環境の研究者」×「2児のパパ」の三刀流で、頑張っていきたいと思います。

#### シルバー川柳

WEB予約 予約できたか電話する  
聞き取れず隣にならって空笑い  
五十年かかって鍋と蓋が合う  
出典：(公社)全国有料老人ホーム協会

#### 新入会員紹介

ふじいのぶお  
藤井伸生さん  
3月入会

会員募集中！  
詳しくは下記のQRコードからどうぞ



#### 編集後記

『終のすみか』のアンケート結果はいかがでしたか？在宅で生活を続けていくことに限界を感じてきたら、施設の利用も考えざるをえませんよね。

しかし、せっかく選んで入居したのに嫌になっしまう例は多いようです。施設の対応が悪い、夜間のトラブルが怖い、想定外に費用がかかる等、入居前には分からないこともあるから仕方ないです。それと最近も聞いた話では、入居者同士「話せる人がいない」とのご不満が多いとのこと。暮らしぶりが違った人たちとの話が合わないのは仕方ないです。

事前の対策として、元気なうちに「気の合う人」と一緒に考えてみる、下見に行ってみる、体験入居してみるのがいいようです。最終的には「気の合う人」と一緒に入居できれば理想的ですよね。いかがですか？

(敬)